

井深 対談

私を支える母の言葉(1)

久しぶりの井深対談、ゲストは土曜日曜のニュースの顔ともいうべき、NHKの桜井洋子さんです。昨年放映された“わが友 本田宗一郎”のナレーターをなさったのが御縁でお互いファンになられたようです。

しゃっきり、しっかりした姿ばかりで見慣れていた桜井さんが、実は大変な笑い上戸で涙もろい…かわゆい方だと知らされた、対談のひと時。

因みに、その日は、井深理事長の「文化勲章」受章発表から二日目、室内には見事なお花がいっぱい！！の嬉しい日でした。

文化勲章おめでとうございます！

桜井 なんと言いましても、まずは文化勲章ご受章おめでとうございます。

井深 ありがとうございます。

桜井 知らせを受けられたのはいつでいらしたんですか。受章式は十一月三日ですよ。

井深 ええ、だけど正式な書類はまだ…。

桜井 そういうものなんですか。

井深 閣議が済まない、ということです。例の政界のごたごた続きで、まだ何もいただけていない。

桜井 空転していて…。そうなんですか。最初はお電話であったんですか。

井深 ええ、最初の電話は軽井沢にまだいる頃…。九月二十四、五日でしたかね。まだ内々だけれども、候補になっていますので。

それで、もちろん受けてもらわなきゃ困るけれども、という確認の電話だったんです。

その時いろいろ、十一月三日には何時までに坂下門からお入りいただいて、というようなくだりを全部聞いて、それから何にも来ないから、本当かなって…(笑い)。

後ほど確認のペーパーを、と言ったきり、全くペーパーが来ないし。

桜井 今日は十月二十二日ですよ。まだ何も来ないんですか。

井深 そう。それで取り消されるかもしれないから、何にも言えないと思ってい

たら（笑い）取材の連絡があったので、ああ、じゃこれは本当なんだなと。

桜井 でも、文化勲章ですもの、初めてお聞きになった時は、いかがでしたか。

井深 夢にも思っていなかった。文化功労者の時もうそだと思った。私はそんなものには縁がないと…。

桜井 それこそ、もう勲一等までおもらいになっているんですよね。

産業界で文化勲章をおもらいになったのは、もちろん過去に例がないんですよね。

井深 今度初めてだそうですね。

電子工業のほうでは、初めてテレビを作った高柳健次郎先生がもらっておられる。高柳先生の場合には、テレビを一番最初に作った業績です。

ただ電子技術産業というジャンルで、文化をどういうふうに変えていったかという、そういうものでは、私が初めてだそうですね。

高柳先生の場合は本当に最初から部品まですべて、自分が手仕事で作っていったわけです。研究して開発して、一つのを創り上げたという…これは私は偉いこと、大したことだと思いますよ。世の中のためということを、多少なりとも私はやったかもしれないけど、創造とか、そういう意味では、高柳先生は本当の開拓者です。



桜井 でも、その高柳さんと同じ文化勲章をおもらいになって。井深さんは技術とともに、産業界としてそういう形をずっととってこられた。それに対する文化勲章というのは産業界の皆さんが、もろ手を挙げて喜ばれたんじゃないですか。

井深 産業界は喜んでくれたようです。でも、私自身はこのところ、いろいろな故障が起きて、体が不自由になったのが残念です。

桜井 報道では、盛田さんとお二人で並んで記者会見していらっしゃいましたけれども、盛田さんも本当にご自分のことのように喜んで

いらっしゃいましたね。

井深 本当に自分のことと同じように…。

桜井 こういうものはあまり比較はするものではないし、できないかもしれないんですけども、今回の文化勲章と勲一等の時と、どちらがうれしいですか。

井深 勲一等の時は、多分産業の振興と発展ということではいただいているんです。だから、意味が違ってるとでしょう。自分が目ざして進んできた、そのことが、世の中にいい影響を及ぼしたから、それに対してご褒美をあげましょうと言われてもらうのとは。

桜井さんは若いから分からないかもしれないけれども、昔はラジオは立派な家具のような扱いで、ちゃんと家の中に、その場所がきちんと決まって、大事に置いてあるようなものだった。一家に一台なんて言えなかった。それが今はもう、いわゆるパーソナルなものになってきたという、そういうところがすごく違うし、ビデオや映画でも、それに伴っていろいろな番組でも、みんないつでも、どこでも見られるようになったんですよ。

桜井 ビデオなんかまさにそうですね。

井深 人間のタイムシフトが変わりましたね。今までだったら朝七時のニュースは朝七時じゃなきゃ見られなかった。それが桜井さんに毎日会いたければ、土曜・日曜のニュースをビデオにとっておいて、その気になれば毎日会えるようになったという、そういうことが文化として、今までと根本的に違ってきたんですよ。

桜井 それこそ、私も毎日…。私は以前、朝の番組を長く、通算で七年担当しておりまして、当時は毎朝三時には起きていたんですけども、今は夜の番組ですから、起きるのが八時半ぐらいですわね。

井深 そうですか。

桜井 ええ。ただ、やっぱりこういう仕事をしていますから、朝どういう形のどういうニュースを放送したのかと心配なわけですね。ですから七時の「モーニングワイド」を録画しまして、それでビデオを再生して、毎朝、見ているんです。

今はそんなふうに、何か普通のように使って当たり前になっていますけれども、一番最初にこういうものを作ろうと思って、またそれができたというところが、考えればすごいですね。

井深 この間も江崎玲於奈さんが、今まであったものの質を高くするとか、量を多くするとかということではなくて、全く異質のもの、今まで全くなかったものを生み出してきたところに特異なところがあると言ってくださいました。

桜井 そういう発想というのが、どういうところから生まれてくるんでしょうね。

井深 とにかく違うものを作りたいと思った。そして、それを産業にしてみまおうと…そんなことは聞くほうにとっては野望ですよ。

桜井 野望！ 私が、去年の本田宗一郎さんの追悼番組で井深さんにお話を伺った時にも、幾つか非常に印象的な言葉がありましたね。その中の一つが、今まで特

別に会社を大きくしようとか、資本金を大きくしようとか、儲けようとか、そう思ったことは一度もない。でも産業を興したいという気持ちは、いつでも、今でも持っているとおっしゃったのがやっぱり強烈でした…。その一言で感動したんですけども、今また、野望という言葉で…八十四歳でいらっしゃいますよね。

そういう心とかお気持ち - それが若さという言葉で適当かどうか分からないんですけども - はお小さい頃から持っていらっしゃったんでしょうね。

自由闊達に、愉快に…



井深 テープレコーダーにしても何にしても、作る時、部品を使いたくても、規格が違うんですね。それまでのものというのは家具的なものだから、全部大きいし、真空管でも、コンデンサーでも、モーターでも何でも、ある一定の大きさですよ。何を作るにしても全部小さいものを新しく作らないとだめだった。

でっかい見本はあったんです。でも、ドイツ製にしても、アメリカ製にしても、そのまま外国から来たら、大きなもので、同じものではないっこないわけですよ。だからそういう外国でやってなかったものをやるとすれば、本当にコンデンサーから電池から全部小さくしなくちゃいけない。でも、そんな小さいのを見たこともないし、作ったこともないし、第一その発想がない。

それでまず部品屋さんを説得にいった。コンデンサーにしても、スピーカーにしても、何にしても全部、小さい小さいものをこしらえてみてくれとね。

桜井 ご自身の足で回られたんですね。

井深 それが終戦後の昭和二十九年頃。みんな、そんなばかなと最初のうちは言っていたのにだんだんやってくれて…。日本産業はそれまで、外国の見本をそのまま真似ることばかりやっていた。

桜井 やっぱり私が井深さんは素晴らしいなと思うのは、普通常識的に考えて、これこれこういう技術がある。これがあるから、これを使ったらこういうものができるんじゃないかと思うんです。そうじゃなくて、これがあるからこれを作

ろうじゃなくて、これを作りたいとまずそれを決めるんですね。それからこれを作るにはこういう技術が必要だ。こういう部品が必要だ。その部品を作るには、またこういう工作機械が必要だと。その発想で今のソニーがある、井深さんの発想なんですよ。なかなかそういう会社はないんじゃないでしょうかね。

井深 だって、作らなければ何も無いから…。そうせざるを得ない。

桜井 普通だと、いろいろな技術がすでにあって、これを作ろうと思うんだけど、井深さんというか、ソニーの場合にはこれを作りたいとまずっておいて(笑い) そのためにこれを作ると。その部品を作るためにこの工作機械を合わせる、作るという発想が違うんですよ。

その精神が今でもソニーにはずっと…。もう創立五十年近いですよ。

井深 四十六年たっているんですからね。

桜井 それがまだまだ脈々と受け継がれているんですよ。

衛星放送で私が「トップインタビュー」という番組を担当してまして、先だって、大賀社長にお話を伺いにいきました。

創業の精神というものが、最初はあったにしても、半世紀近くやってこられると、どうしてもそういうものはなくなっていくのではないかと。しかしソニーではずっとそれが受け継がれていくのは何故でしょうかと聞いたら、「それはやっぱり井深さんの精神です」って、強くおっしゃっていたんです。

やっぱり井深さんの一番最初にお書きになった会社の設立趣意書の精神がいまだにずっと受け継がれているって、何度もおっしゃっていましたよ。

井深 自由闊達なる、愉快なる理想工場…。

桜井 そうそう。懐かしいですね(笑い)。

井深さんは八十四歳で、まだ野望という言葉をお使いになりましたけれども、それを持っていらっしゃるんですね。

今、野望ということをお伺って、今回、一つ文化勲章をおもりにになりましたけれども、他にもいろいろ、ずっと幼児開発協会もやっていたらっしゃるし、東洋医学の研究とかもやっていたらっしゃいますでしょう。私はもしかしたら、そっちのほうも理由に入って、と思ったんですけども、やっぱりテープレコーダーとか、トランジスタラジオとかでしたので…。ご本人もおっしゃっていましたね。今度は違う分野で勲章をまたもらって。そういう野望を実はお持ちだったりして(笑い)。

井深 ノーベル賞だって二つももらった人、二、三人いるよ(笑い)。

桜井 幾つかの分野に分けられていますからね。文化勲章も今度は受章理由を変えて、もう一度、幼児開発の分野で…。

井深 でもなかなか人に分かってもらえない。分からないと評価もしてもらえないからね。テープレコーダーや何かのことも、今頃やっと分かってもらえてきたという感じがしますね。

桜井 そうですね。

井深 レントゲンが第一回のノーベル賞をもらったんだけど、それは確か放射線でもらったのではないんです。そのときは放射線については評価されなかった。違うものでもらったんですよ。

桜井 ノーベル賞といえば、江崎玲於奈さんのエゼキダイオードはソニーの開発の中での発見でしたね。

井深 最初の発見はトランジスタの開発をされていて、長いこと実験していたら、ある現象が出たんですね。それがいわゆるトンネル現象ということです。江崎さんが偉かったのはその現象が出た時に、ああ、これはトンネル現象だということを知っていたから…。

桜井 みんな結局そこなんですよね。同じものを見ても気がつかなければね…。

井深 気がつかないで、ぼんやりしていれば分からないんです。だからソニーの研究所にいたので、できたことはできたけれども、ただ見過ごしてしまえば、それまでのことを、よく勉強していたから見つけれられた。やっぱり本人が偉かったんですけれどもね。

桜井 そのあたりって本当にそう思いますよね。一見、別に何でもない風景とか、事実を見ても、ちゃんと見える人と、見えない人とが…。それが大きいですね。

例えば私も、以前『地球大紀行』という番組を担当していました時に、地球というのはそもそも直径一〇キロぐらいの鉄隕石がぶつかったことが原因ででき上がったと、そういう番組をやったことがあるんです。その時にスタッフが手のひらに乗る、小さい石をくれました。別にそこらの川原にあるのと同じ、なんの変哲もない石なんです。でもそれは実は三十六億年前の石なんだと。それはやっぱりそのことを知っているか、知らないかによって全く意味も価値も違って来るわけですよ。ですから、今のそのお話なんかはよく分かりますね。

“開発” とは…

桜井 私、この『幼児開発』を読ませていただいて、まず非常に表紙の絵が楽しいんですね。さっき伺ったら、これは子供さんのお描きになったものですか？

井深 ええ。世界の子供のね。

桜井 だということではびっくりしたんです。

ところで、全く素人が思ったことですが、これは昭和四十四年からずっと続いているものですよ。幼児開発協会という、その「開発」という言葉が、当時は高度成長の波の中で非常に意味があって、まさにそうだったと思うんですけども、ここのところに来て、結構、地球環境なんかの問題が随分出てきたりしまして、「開発」という言葉の意味合いが少しずつ変わってきているというか、違うニュアンスで送られているし、また受け取られていますよね。

だからこの先ずっと、これは長年続けていっていただきたいと思うし、もちろん素晴らしいことだと思うんですけども、何か言葉から受ける印象、「開発」という言葉がもしかしたらどこかで誤解を受けるようなことは…。

井深 それは（咳き込む）

桜井 そのあたりいかがですか。びっくりしていらっしゃる（笑い）

こんなに四半世紀も続けてこられたのに、率直な私の第一印象で言うと…。

井深 開発というのは…大丈夫。

桜井 大丈夫ですか（笑い）

井深 「開発」は永久に続けるもの…。

桜井 続けるんでしょう。もちろんそれはずっと続けていただきたい。そのために、逆に、幼児開発の「開発」という言葉は…。

井深 お母さんが子供に注ぐ愛情とまなざしが子供の力を開発する原動力であるように、その意味ですべてのものは「開発」によって開発される。

だから、その意味を、本来のいい意味に幼児開発協会が変えていかないといけないということです。

これからは「開発」の意味を、より明るいものとして開発していかなければ…。

でも、二十三年前の出発点でも、「開発」という言葉は大変物議を醸したんですよ。

桜井 これをおつけになって？

井深 ええ、人間をいじくり回してと…。多分「開発」というのを人間に使ったのは、幼児開発協会が初めてだったと思いますよ。だから「開発」の問題がついて回る。

桜井 なるほどね。じゃ、二十三年前とはまた違って、もっと今は言葉が違う形で一人歩きしていますんですね。

じゃ、どういうことで幼児開発ということをお始めになったのか、開発の真意を教えていただければ…。

井深 それは何と言ったって、お母さんの開発です。

桜井 そうでしたね、子供の開発は母親の開発だと。それは『幼児開発』誌の後ろにも書いてありましたけれども。

井深 だからむしろ「開発」という言葉より、「幼児」のほうをちょっと失敗したかなと思っているんですよ。幼児開発よりも母親開発…。

桜井 なるほどね。

井深 開発ということはやっていくんだけど、だんだん勉強していくうちに、幼児を妙にいじくりまわして開発するんじゃないくて、これはやっぱり母親を啓蒙しなくちゃいけない。母親の教育がまず大事だ、ということになったから、「幼児開発」という題はちょっと早まったかなと思っていた時があるんです。

桜井 確かに、幼児ということはそれこそお母さんのところですよ。胎教の頃からそうですよね。

井深 それがどんどん嵩じて、幼児どころか、今や胎内の時からですからね。

桜井 私は今日、こちらに伺う途中、車の中で、開発に代わるどういう言葉が適当なのかなと考えたんですけども（笑い）。「母親」「お母さん」「人間成長」、そんな感じのほうがりびったりくるのかなとか「母親成長」もおかしいですものね。やっぱり、「幼児開発」…。

井深 ああ。でもそういうふうに言われると、「開発」という言葉は外せなくなりますね。「開発」という言葉の持つ本当の意味を、どうしても幼児開発協会はやっていかないといけませんから。

幼児教育へのきっかけ

桜井 『わが友 本田宗一郎』という番組では、去年はもう八時間も伺ったりとか、いろいろとお話は聞いていますし、あれは三日に分けて、午前中二時間、午後一時間とかずっと撮らせていただきまして、それをまとめて番組にしたんですよ。

だから結構、お話はお聞きしているんですが、その中で、私が常々、教えていただきたいなと思っていることの一つは、まず幼児開発のことに取り組まれたきっかけ、これはいつ頃からでいらっしゃるんですか。

井深 自分の仕事だけで世の中はやってはいけないというのと、仕事でお金を儲けたら、仕事のことばかりに使わないで、少しでも世の中に還元しなくてはならない、というのは、いつもずっと持っていた気持ちなんです。

そして、世の中のために、実際に何をしたらいいのか、それはしょっちゅう考え

ていました。

桜井 それはもう昭和二十一年に、東通工（ソニーの前身）を新しく興されて、最初の頃からなんですか。最初は一生懸命、電気座蒲団を作ったりして…。私も薄いあの座蒲団を見せていただきましたよ（笑い）。

井深 それでテープレコーダーを売り出したら、どこで一番たくさん買ってくれたかという、小学校、中学校だった。ところが、そのテープレコーダーがああ当時は高くて、なかなか買えないのに、学校が一生懸命工面して買ってくれた。お得意様の中の一の主なところだったんです。とてもありがたかった。そして、そんなにみんなが一生懸命お金を集めて買ってくださるんであれば、小・中学校の教育にすごく役に立つんだらうと。

当時の日本は、国全体が大変な時で、何よりも国を建て直すことが先決、それには科学技術の振興、そしてそのためには、理科教育が大事だと考えましたね。それなら小学校からだと…。

自分も何でこういうふうにな技術開発とか、そういうものに興味を持ったかという、本当に子供の頃から好きだったけど、そういう好きなものに自然に興味がいくように母から教育を受けたんで、やっぱり子供の時にそういうものに触れたり、興味を持ったりして、勉強をすることで、そういうマインドがずっと持ち続けられるんだとしたら、やはり小・中学校の理科教育、特に小さいうちから、というのがすごく大事なんじゃないかと。

それにもしかしたら、そうした教育を受けた子たちが大きくなれば、ソニーを受けて、いい技術者が来るかもしれないと（笑い）。

桜井 そこまで考えられたんですか（笑い）。テープレコーダーは当時十五万円とか、十六万円ぐらい？

井深 いや最初のうちは五十万ぐらいしたんですよ。

桜井 そうか。それがしばらくして、十何万になったということで、一層広まったんですね。

井深 五十万円から十四万円になったのかな。

それで、理科教育振興について、最初に相談に行ったのが、東大の茅誠司先生のところ。小・中学校の理科教育の振興のために何かやりたいけれども、どうだろうか。

桜井 そうですか。

井深 そうしたら、茅先生が大賛成だと喜んでくださった。しかも、その上に東大の現職の総長さんだったのに、その審査員を自分がやりましようと言ってくださ

って。それで最初は、ソニー小学校理科教育振興資金といって、小学校の理科教育だけを対象にして、教育計画書を募り、特別に優秀な教育を旨としているところに賞として、奨励金を出すようにしたんです。

桜井 それは昭和何年ぐらいなんですか。

井深 三十四年。

桜井 昭和三十四年っていうと、まだまだ、それこそ東京オリンピックを前にして、高度成長の道を本当に走り続けていた時期…。

井深 それで茅先生が御みずから、審査委員長になってくださって、しかもほかの審査委員も、科学技術庁や文部省から、錚々たる方を集めてくださった。

桜井 いずれにしても、まだ各企業だって自分のことで精いっぱいという時に、そういう形の奨学金みたいなことをやったというのは、珍しかったんでしょう。それはご自身の体験の中で、そういうものが必要だと思われたんですね。

井深 優秀校四校の賞金が各百万円じゃなかったかな。その他に十万円が二十校。今の価値で言えば、結構な額になるでしょう。

そういうことをやっていたら、倉敷レーヨンの美術館もやっていた大原総一郎さんが、井深さんは小学校の理科教育に熱心だからといって、長野の松本で、小さい子にバイオリンを教えている鈴木鎮一先生という方がいらっしゃる、と紹介してこられたんです。

桜井 それはクラレの大原さんがご縁だったんですか。

井深 ええ、それで鈴木先生がいらっしゃって、いろいろなバイオリンの子供たちの話をしていたら、習いに来るお子さん - お姉ちゃんやお兄ちゃんに妹や弟のチビちゃんがついてきますね。お母さんが家に置いておけないから。

そうするとそのチビちゃんのほうが、上の子よりも早くうまくなっちゃう。これはもしかしたら、もっと早くから教えたらいんじゃないかということを経験した話から考えることになった。

桜井 小さい頃の教育とまではいかないかもしれないけれども、私も本当に環境がいかに大事か、というのは思いますね。

つづく

井深 対談

私を支える母の言葉(2)

以前に週刊誌で、民放から引く手数多のNHK女性アナウンサーの中で、揺がぬ姿勢を見せているのが桜井洋子さん、というような

記事を読んだことがあります。お話をうかがっている中で出てきたお母様の言葉…“何さんの気でいるんだね”の持つ深さと重み…

それが現在の桜井さんのお人柄にぴたりと重なっているのを感じました。そして“何十秒も抱ける人を早く見つけなさい”という理事長の言葉に見せた、柔らかな笑顔が心に残る人でした。

“何さんの気でいるんだね”

桜井 小さい頃の教育とまではいかないかもしれないけれど、私自身の経験からも本当に環境がいかに大事かというのは思いますね。

私の例で言いますと、私は新潟出身ですが、子供の時から、母がいつも私に繰り返し繰り返し言ったのは、新潟の言葉で「何さんの気でいるんだね」と。それは“何様のつもりでいるの”、という意味なんです。

とにかく何か人の道からちょっと外れそうなこととか、あまり良くないようなことをする時に「何さんの気でいるんだね」と、私はいつもいつも言われました。だから、その言葉がずっと自分の中にありまして、何かするという時に考えると、その言葉に戻るんです。

例えば仕事柄、講演を頼まれる機会が多く、また行く人も多いんですけど、実際に私自身もあちこちから講演を頼まれるんです。でも、私の中にはやっぱり母の「何さんの気でいるんだね」というのがまだ残ってしまっていてね。それでとてもそんな人様の前でお話をするのは柄にもないということで、講演は基本的に全然しないんです。年に一回は仕事でどうしても出なくちゃいけないんで行きますが、それ以外はしません。

講演というのは、大体、形がそれなりに決まってくるでしょう。何回もやるほど中身が決まってくる。でもそれに応じての講演料というのは過分にいただきますでしょう。そうすると、だんだん自分の感覚がどうしてもずれていってしまいますし、そのあたりも、自分で自分をいましめなければいけないんです。だから自分自

身の生きる上でのいましめの言葉として、母の「何さんの気にいるんだね」というのがいつも心に浮かぶんです。支えなんですね。

やっぱり小さい頃の母親の言葉とか、親の生きざまというんですか、そういうものを知らず知らずのうちに、子は規範にして生きていますね。

ですから、小さい時が大事だとおっしゃるのは、とてもよく分かるような気がします。

ところで、今、女性たちは外に働きに出たいという思いが強いようですよね。井深さんは女性が外で働くのはあまり賛成ではありませんか。

井深 いや、働く機会があればずっと出ても、常に自分を新たにすれば結構なことです。しかし、母親としては、まず育児のほうを優先させるべきです。

これはもういかに反発を受けようとも、言わなきゃならない。母親の特権ですから。

桜井 女性たちも母親になりたいとみんな思っている、でも働きたい。やっぱりある程度両方やっていくには、もっときちんとした制度を作るべきなんじゃないかな、と私は思うんです。日本でも育児休業制度というのが去年からスタートしましたけれども。

井深 育児は重大なことだから。でも今、育児は、お腹が空いたらミルクをあげるとか、おしめを替えるとか、お父さんもそれをしなさいと言って、それをやる父親も増えてる。そんなことは誰がやってもいいかもしれないし、誰でもできる。

ところが人間を育てるということに関しては、お腹の中にその子がいる間からが重要なことである、ということをおもな忘れている。そればかりは、できるのはお母さんだけ。絶対、他の人にはできないことです。もっとそういうことを、これから本気で考えてもらわなくては...そのことの啓蒙をしないといけない。ただ、愛情があればいいとかいうんじゃなくて、ある時期しっかりとスキンシップがなくなちゃだめです。

桜井 育児休業法も非常に片手落ちといいましょうか、一応制度としてはスタートしたんですけれども、普通、お給料が出ないわけです。お母さんたちは赤ちゃんを産めば、育児休業の一年間、赤ちゃんのそばにいてあげたいとみんな思いますよね。

でも結局お給料が出ないと困ってしまう。若い人たちはもともとお給料が少ないわけですからね。なおかつ休業中は社会保険料などが持ち出しになって、自分で払わなきゃいけないんです。そうすると全然お給料が入らないのに月々何万円かを自分で払わなきゃいけない。

結局、育児休業制度で休みたい、赤ちゃんのそばにいたいんだけど、生活が苦しくなるので、ベビーシッターとか、あるいは保育所に預けたりして、それで働きに出ている。そういう人たちが多いんです。

井深 根本的に、育児休暇の問題は企業でも守るべきものというふうにしなければいけないんでしょうね。

桜井 私、以前にそういう取材をしたことがあるんです。スウェーデンに行っただんですが、スウェーデンにも育児休暇制度ってあるんですけども、それはもう八〇~九〇%の所得保証なんです。お給料も出るし、妊娠、出産休暇が、母親五十日、父親が十日あるんです。それから育児休暇が一歳までじゃなくて八歳まで。両親どちらでも、最長八年間で四五〇日あります。その他に、子供が病気の際は両親合わせて、年間一二〇日という充実したものです。

井深 八歳 - そこまでじゃなくても三歳まででもいい。

桜井 日本の場合、三歳まででいいとお考えですか。

井深 私の考え方からすれば、厳密には最初の一年間が大事なんで。

桜井 一歳でいい!?

井深 いいとは言わないけど、人間をつくるのには最初が、それぐらい大事だということですよ。

桜井 そうですね。そういう意味じゃ、いいんですけども、本当にそばにいられる環境をつくってあげなきゃいけないんですよ。

井深 でも、制度だけをつくっても、本当の意味での大切さが解っていないと…。現状では、いくら制度ができて、実質的には若い母親にはその制度を利用できないということなんですよ。

桜井 現実性のない、形だけの何も入っていない制度なんです。だから本当に片手落ちですよ。

井深 その一方で、育児は育児の専門家にゆだねて自分は働けばいいという論を言う人もいるけど、それは根本的に違う。

育児休業法について

平成四年四月一日から「育児休業に関する法律」いわゆる「育児休業法」が施行されました。この法律は一歳未満の子供と、一歳以上小学校入学までの幼児期の子供を養育する男女の雇用者は、育児休業等を行うことができるというものです。女性が子供を産み育てながら働き続けることを選択するためには一歩前進の法律です。

その概要は、

- (1) 一歳未満の子を養育する男女労働者は、事業主に申し出ることにより育児休業をすることができる。
- (2) 事業主は育児休業のほかに、一歳未満の子を養育する労働者が就業しつつ、子を養育することを容易にするために、勤務時間の短縮等の措置を講じなければならない。
- (3) 事業主は、一歳以上小学校入学までの幼児期の子を養育する労働者についても、育児休業または勤務時間の短縮等、子を養育することを容易にする措置に準じて必要な措置を講ずるよう努めなければならない。
- (4) 雇用する労働者が常時三十人以下の小規模事業所については、平成七年三月三十一日まで、(1)(2)の適用が猶予される。

というもので、育児休業中の身分は保証されますが、給与は支給されないのが一般的のようです。

スタートが大切

桜井 やっぱりお母さんなんですね。でも一歳までで人間は決まってしまうんですか。

井深 ええ。元の性根といったものがね。人間としての土台…。

桜井 まあ、私なんて手おくれもいいところ。

井深 大変なことなんですよ、赤ちゃんは人間の出発点だから。

いつ人間の基本的な考え方とか、性格とか、そういうものができるかということ、やっぱりお腹に宿った時から生まれて一年の間に、インプットされるものが基本になるような気がする。意地悪なのか、優しい子なのか、それも全部決まっちゃうかもしれない。

桜井 それは宿った時からなんですか。

井深 そう。だからお腹に子供がいる時に、両親に離婚騒ぎがあったとか、仲が悪かったとか、お父さんが浮気をしたとか、そういうようなもろもろのことが、お母さんの気持ちを通して全部生まれてくる子の性格に影響を与える、と少なくとも親は考えなきゃ。

桜井 それは何か統計的なものとか、何かでとられたんですか。

井深 あまりスケールが長すぎて、統計なんていうものはとれない。

桜井 統計なんかで論じるものではないんですか。

井深 幼児開発協会で十五年くらい、母と子のカップルを見たり、これだと思う人に幼児期の体験を聞いてみたりすると、それはやはりそうなんです。もうちょっ

と幼児開発協会のことを勉強してよ…。

桜井 済みません（笑い）。私は子供もいないものですから、その前の結婚もまだしていませんから、それについては何とも言えません。

でも、そのあたりがなかなか誤解されるところかもしれませんね。

ところで、今回の文化勲章の授章の文言に「高潔な人柄」と井深さんのことを一行書いてあったのを見たんです。あれがとてもうれしくて、普通は、受章者の方々のそんなお人柄に及んでまで書いてないんですよね。そこが井深さんのお人柄なんでしょうね。

本当に何ができる、これができるということより、まず人柄ですよ。もちろんその上にお仕事もできて、頭もよければ、それにこしたことはないんですけども。

幼児開発協会には紀子様もお見えになったそうですね。

井深 ご出産の三週間前くらいでしたか、マタニティークラスの見学に、こっそり内緒でいらっちゃって。だから、こちらもお写真やなんかご遠慮して、惜しかった（笑い）。

桜井 もっと自由にお出かけにならればね。でも、気持ちが一番大事ですよ。

例えばお腹にいる時に親がけんかをしたり、嫌なことが続いたりして、胎内の赤ちゃんにあまりいい環境でなかったとしますね。そんな場合には、生まれてから一歳の間に悪い影響というものを払拭して、また伸び伸びと健やかに育てるということは可能なんですか。一たん受けた悪い影響というものはどう…。

井深 親次第で直る。後遺症はそんなに長くないだろうと言われてる。でも、お母さんがそのことに気がつけばですよ。で、お母さんがそのことを意識して気をつけられれば。

桜井 その一年間で回復というか…心に傷を持ったまま生まれてきているからといって、あきらめないで、ということですね。

抱きしめの八秒…

桜井 もう一つ質問（笑い）。一歳までの間に、本当にべったり可愛がるということ、逆にそうじゃなくて、ある距離を置いてつき合うとか、まあいろいろな母子の接し方がありますね。

私はもちろん子供はいませんが、私の仲間たちはみんな働きながら子供を育ててきた人が多いんです。そういう人の話を聞きますと、ふだんなかなか一緒にいられないから、一緒にいる時には、本当に思い切り、人から見たら異常なくらい

可愛がる。もうべたべたする、という言い方をする人が多いんですが、そのあたりはどうなんですか。

井深 一度にすごく可愛がって安心させる。“抱きしめの八秒”って、聞いたことありませんか。八秒間かかえて、抱きしめている。それで通じるんです。八秒間って、抱っこしてみると、結構長いんですよ。

桜井 それは生まれた時じゃなくて、いつも…。

井深 そう、いつも。

桜井 一回抱っこをするというのは最低八秒間抱っこしなければいけない、と…。

井深 だからまとめてでもいい。毎日毎日、家に帰ってから、日中の一日は離れて暮らして、例えば保育所から連れて帰ってきたら、八秒間以上抱きしめてやる。

桜井 仲間のみんなはもっと抱きしめているような気がする。八秒ぐらいじゃ足りなくて、それこそずっと五分も十分もひぎに抱えて、わあかわいい、わあかわいい、と何かやっているらしいんです。

ぐっと抱きしめて、最低一日一回は八秒間？

井深 きつく抱きしめる。

桜井 こういう仕事をしていますんで、いろいろ聞きますが、その最低八秒間というのはどうして出てきたんでしょう。職業柄気になりますね（笑い）。どういうところから出てきた数字なんですか。

井深 さあ、知らない（笑い）。

お母さんの呼吸と関係あるんじゃないかな。例えば、深呼吸の一回。

抱っこだって、ただ抱けばいいというものじゃありませんからね。

桜井 やっぱりその抱き方が - んぐと抱きしめるのが八秒間と。

井深 で、母と子がどうも変な関係になったという時に、よく見てみると、お母さんの抱っこがゆるくて、ただ抱いているだけだということもある。そんな時は、もうグウの音も出ないだけ抱きしめてくださいと。そうするとすぐ問題が解決することがある。

桜井 安心するんでしょうかね。

井深 そうなんでしょうね。

桜井 私は八秒間もぐっと抱きしめられた覚えはないんです。でもそれは一歳までということですか。

井深 いや、それはずっと長い間。一日一緒にいないんであったら、特に心がけて。

桜井 でも私は残念ながらそういうふう育ててもらった記憶がありません。

井深さんご自身はお母様からいろいろな話を聞かれて、その強い影響からお仕事も進路も決められたような気がするんですけども、お小さい頃はやっぱりぐっと抱かれたとか、そういう記憶はありますか。

井深 そこまではあんまり覚えてないけど、父親が三歳で亡くなりましたから、母は一生懸命だったでしょうね。よく一緒に寝てたことは覚えていますけど(笑い)。

大体子供が親に抱きついてくる時は、自分が抱きしめてもらいたい時だってよくいいですけどね。でも一般的に、男は照れるからな。

桜井 私自身は、今でいう共働き家庭の子 - 鍵っ子だったんです。父も母も市役所で働いていましたから。それで、もうずっと小学校の時から、帰ってきて「おかえりなさい」と迎えてくれる人がいませんでした。家に帰ったらまず - 私がとても可愛がった弟を小さい頃に亡くしたものですから - 「マコちゃんただいま」とお参りをしまして、それで自転車に乗って友達の家遊びに行くという、幼児の頃の体験はそうなんです。ですから非常にそういう意味では友達がうらやましいというか、いつも「おかえりなさい」と迎えてくれる人がいたらいいのにな、と思いながら。

そして、その小さい頃の体験はずっと引っ張っているなと思います。今、母は東京で兄たちと一緒に住んでいまして、時々、私のところに来たりしますが、私には人と一緒に密度濃く暮らすという経験がないという気がします。だから結婚もしないのかも、と思っているんです。

その一方で、両親に対する思いというのは非常に強くて、それは離れていたからこそだと思うんです。誰を尊敬しますかと言われたら、やっぱり両親を尊敬しますと本当に思っているし、言いますしね。ずっときちんと働いてきた父とか母を見て生きてきましたので。

泣き上戸、笑い上戸

桜井 小さい頃から友達の中で生きてきましたから、友達はいっぱいいるんです。ボーイフレンドもいっぱいいるんですけども、ボーイフレンドの距離から恋人の距離になかなかない。

井深 結論が出たよ。洋子ちゃんの何十秒抱ける人を早くと...

桜井 本当にいいことを言っていた。何十秒もずっと抱ける人って。うーん(笑い)。本当の意味で人に甘えるということが、もしかしたらないのかもしれない。

私はどちらかといったら、父親っ子だったんです。母は働いていたし、家の中のことも忙しいから、いつも叱られてばかりで。父は本当に優しくして一度も怒られたことがないくらい父親っ子でした。

それと、両親はものすごく夫婦仲がよくて。職場結婚で同じ職場でしたし、とにかく仲がいいんです。そういう意味じゃ、家族の仲がよかったんですけども、ただ私自身が早めにもう大学から東京に出てきてしまいましたでしょう。だから子供が大きくなったある時期から、夫婦は夫婦二人で一層仲良くなって、私は私でそういう親に対する親孝行みたいなものはきちんとしたような気もするんですが...

それこそぎゅっと抱かれたなんていう記憶はないですね。ただ父にはしょっちゅうおんぶしてもらったりとかしましたけど。それが母親にはあまりないんです。だからその分、母親に対するあこがれというのは強いんです。今は一緒に買い物とかはしょっちゅう行ったりしますけれども、何か照れて本当に甘えるというのがない。それも小さい頃にぎゅっと抱きしめられた経験が多分ないからじゃないでしょうか。

井深 理性的なつき合いになっちゃうの。

桜井 思いは人以上に、私もそうだし、親のほうもやっぱり強いようですのに。表現できないんですね。

井深 ご長女ですか。

桜井 長女のような...。姉はいたんですけども、すぐ亡くなりましたんです。兄がいて、私がいて、弟がいて...

それで、母が働いていたものですから、弟を幼稚園に連れていったりして、私が弟の面倒をずっと見てたんです。だから弟が死んだ時には、自分の息子が亡くなったような感じで、寂しくて...

弟は私が小学校一年の時に亡くなったので、もう何十年も前のことなのに、それでもよく覚えていて、忘れません。

ずっと弟の写真を置いて、その話をするとすぐ私は涙が出てくるんです。ごめんなさい。

井深 何十秒抱いても文句を言わない人を探さなくちゃね。何時間でもいいんじゃないですか、最低八秒ですから。

でもいいなあ。桜井さんが涙を流して。TVで拝見するとしっかり者なのに、今日はいいところを見せてもらっちゃった。

桜井 そうそう。去年、軽井沢に伺った時も、本田さんの奥様が最後に本田さんをおぶって歩かれたということ、井深さんから伺って、ちょうどうちの父も亡く

なったものですから、泣けて泣けて。あの時は本当に失礼しました。

本田さんの奥様のところにお話を伺いに行った時にも、奥様はすごく理路整然とお話ししてくださったんですけれども、私が一人ぼろぼろと（笑い）本当に何だか逆だなと思いながら随分泣いちゃったんですけれどもね。

井深 本田さんの奥さんは本当にしっかりしていらっしゃるね。

桜井 やっぱり、あの奥様がいらっしゃってこそ、本田さんがいらっしゃった。

井深 奥さんに甘えられたんですよね。

桜井 でも私は涙もろいくせに、笑い上戸でね。すぐまた笑って。

朝の番組の時には、よく笑ってしまってニュースが読めなくなって困りました。

それが一番自分でも不安で、スタッフもみんな不安だったのは、昭和天皇がご病気をなさった時です。

ゲンシユクにご病状を言う時に、もし例えば隣の人のお腹がクーッと鳴ったらとか、考えると結構いろいろなことがあるんですよ。それでおかしくなったらどうしよう…。

それが私も一番不安だし、スタッフも心配でね。

井深 どうか吹き出しませんようにと。

桜井 ええ。他に失敗があってもいいから笑わないでだけいてくれれば、とみんなに言われましてね。

井深 気になって、なお笑っちゃったりね。

本当にお忙しい桜井さんなのに、今日は長い間、どうもありがとうございました。

桜井 いえいえ。今日は何十秒間抱きしめるといふ、あの一言が効きました…。
頑張りたいと思います（笑い）

おわり

井深 大（いぶか まさる）

一九〇八年栃木県生まれ。一九四六年ソニー創立。幼児開発協会を一九六九年に設立。一九九二年文化勲章受章。ソニー(株)ファウンダー・名誉会長。幼児開発協会理事長。著書に『幼稚園では遅すぎる』『0歳児の驚異』『あと半分の教育』『0歳』『井深大の胎児は天才だ』などがある。